

ふるさと じまん

わたしのお気に入り

富山市



1 富山城址公園南西広場モニュメント、富山市のキャッチフレーズ「AMAZING TOYAMA」
富山県の快晴日は2020年では16日のみ

富山の過去、 現在、 未来

宮本 暦
(平成13年卒)

富山県の紹介

富山県は本州の中央部、中部山岳地帯の北に位置して日本海に面しています。2020年では快晴日数は16日（全国39位）、日照時間は1,665時間（全国42位）であることから、富山県は快晴日が少なく、曇天日が多く、多雨または多雪の地域といえます。降水量は晩秋から冬季にかけて非常に多く、日照時間は12月～2月が最も少ないです。この冬は雪にとじこめられ、年間を通じて日照の少ない気象条件と中央高地のふもとに位置して富山県から他地域への交通には難所が多かったという地理的条件などが富山の生活、伝統、産業に影響を与えました。

北前船

富山県は昆布の消費量が多いです。昔から昆布を使った郷土料理が豊富にあります。富山県では昆

布は広く利用されていますが、県内で消費される約95%の昆布が北海道産です。富山で広く利用されている昆布は、北海道から北前船で運ばれました。

北前船とは北海道を含む日本海沿岸諸港と瀬戸内海諸港や大坂を結んだ廻船です。幕藩体制が確立していくなかで、幕府や諸藩の年貢米を大坂にて現銀化するため大量に輸送されるようになりました。また各地の物資の流通、文化の伝播に大きな役割を果たしました。北前船の積み荷には、北海道へは大坂より木綿・酒・糸、瀬戸内海より塩・紙・砂糖・御影石、富山からは米・酒などが輸送されました。関西へは北海道より海産物中心（鯨粕・数の子・身欠き鯨・干しナマコ・昆布など）でした。

富山では岩瀬が北前船の寄港地・船主集落で大いに栄えた地で



2



3



4

- 岩瀬には贅沢な材料をふんだんに使って造られた建物が残っている
- 2 旧馬場家米蔵をリノベーションしたブリューパブ「KOBO」
- 3 四十七銀行跡地
- 4 北前船廻船問屋森家に飾られている神通丸の模型

す。岩瀬は旧北国街道沿いの街で、富山市の北部の海に面した街です。贅沢な材料をふんだんに使って造られた廻船問屋が残る街です。北前船主・廻船問屋で北陸の「五大北前船主」のひとつである馬場家が有名であり、当時の繁栄を今に伝える、豪華絢爛な造りが見どころとなっています。

葉の富山

葉の富山を一躍全国に広めた有名な逸話があります。1690年に腹痛になった大名に富山第2代藩主前田正甫が反魂丹を服用させたところ、驚く早さで回復しました。これに驚いた諸国の大名が深く感銘を受け、全国から富山の売薬の来訪を求めるようになったと言われています。その後、藩主自らが率先して医薬品産業を牽引し、富

山の薬が有名になりました。(尚、この逸話は歴史的裏付けはありません。)

富山藩は、加賀藩第2代藩主前田利常が1639年に越中国10万石の分封を願い出て成立しました。富山藩の領地は神通川と常願寺川の間流域に限られ、重要な穀倉地帯である砺波郡と射水郡、重要な鉱山があった新川郡は加賀藩が財政上、手放せなかったため加賀



5

5,6 富山城
7,8 池田屋安兵衛商店と越中反魂丹
富山藩は薬業が重要な産業だった



6



7



8

藩に取り残されました（富山藩の領地は現在の富山市のおよそ半分）。このため、富山藩は成立時より財政は逼迫しており、歴代の富山藩主は産業振興に苦心していました。富山藩主 前田正甫は藩財政の柱の1つとして医薬品産業を奨励し、薬都富山の礎を築きました。

富山の薬が有名になったのは独特の販売方法です。それは、販売業者である売薬が医薬品の入った薬箱を無料で配置し、定期的に巡回して未使用の残品を引き取って新品と置き換え、服用した薬の代金だけを徴収する「先用後利」と呼ばれる画期的な配置薬商法です。その他に富山藩は全国で薬の行商ができる許可証「他領商売勝手」を発行し、売薬商人を組織化しました。富山藩ではこのような振興策により、薬業が重要な産業となりました。

富山藩で作られていた薬は清の

漢方薬が原料でした。江戸時代は海外との貿易が禁じられていました。当時、薩摩藩は清と密貿易をしており、清→琉球→薩摩→新潟→富山のルートで漢方薬原料を調達していたといえます。薩摩藩はこの密貿易の利潤から軍備増強を行い、倒幕運動を行えたといわれています。明治維新の隠れた側面に、薩摩藩で行商を行っていた富山の売薬の存在があります。

明治維新後、政府は産業近代化とともに東洋医学を西洋医学に切り替えました。従来の和漢薬、売薬業が規制を受けるなか、売薬業者は、売薬の発展、近代化を目指し、専門知識をもつ人材の育成に力を注ぎました。明治27年（1894）、薬業教育と配置員養成を目的とした、私立共立薬学校を設立。その後、大正9年（1920）に官立に移管、昭和24年（1949）には国立富山大学薬学部として現在に至ります。「くすりの富山」

として300年以上の歴史は今も受け継がれています。

未来の富山

富山市は人口減少下でも持続可能なまちづくりを模索しています。現在、富山市はコンパクトシティをコンセプトとして街づくりを行っています。人口減少という抗えない事実の中で、未来の市民に健康で幸福で文化的な生活を約束するためには、都市計画のみならず、産業も健康福祉も芸術・文化や教育も、市民生活に関する全てのことをトータルに考える必要があります。そして、富山市のコンパクトシティはそういう市民意識の改革から始まりました。富山市のまちづくりの基本的な方針は「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」です。コンパクトなまちづくりを実現するための3本柱について簡単に紹介します。



9～12 富山駅前。富山市は公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりの実現を目指している

10
1 本目の柱は、「公共交通の活性化」です。これからますます高齢者が増加し、自分で車を運転できない市民が増えてくると、公共交通が使えない地域には住み続けることができなくなります。さりとて、市内の隅々までくまなく公共交通を走らせることは、民間交通事業者には経費負担の面で無理があり、仮にそれを行政が丸抱えすれば、行政が優先的にやるべきことができなくなり、やがては財政破綻ということにもなりかねません。未来においても守り・育てる路線を明確に選択し、その沿線に集中投資をすることが必要があります。富山駅新幹線高架下での南北LRT接続、富山駅北側の富山ライトレールと富山駅南側の軌道線を富山駅高架下で接続する「路面電車の南北接続」を行い、公共交通利便性の向上のため、活発な開発が行われています。これは地方都市のコンパクトシティ実現のモデルとして全国の多くの自治体より関心もたれています。

コンパクトなまちづくりを実現するための2本目の柱は、まちなかや公共交通沿線地区への居住促進です。富山市では、中心市街地と公共交通沿線居住推進地区に居住を推奨・誘導するため、一定の条件のもとで、良質な住宅の供給者や取得者に助成を実施しています。
コンパクトなまちづくりの3本目の柱が中心市街地の活性化です。公共交通を使いやすくし、公共交通の沿線に住んでも、行くところがなければ意味がありません。また、富山市では徹底して郊外の大型ショッピングセンターの立地を阻止し、中心市街地に人が集まることの意義を尊重してきました。その、中心市街地活性化の取り組みの中で、最も注目をされてきた事業が再開発事業です。
富山市では、コンパクトなまちづくりのために様々な事業を展開しています。路面電車を作るだけ、まちなかに広場を作るだけ、再開発でビルを作るだけ、それだ

けでは、決してコンパクトなまちづくりは成功しません。様々な事業を、包括的に、積み上げを行っています。「中心市街地活性化の起爆剤」などというものは存在しません。地道な事業の繰り返しによってこそ、正のスパイラルが生まれます。富山市におけるコンパクトなまちづくりの効果としては、中心市街地では平成20年から、公共交通沿線地区でも平成24年から、転入人口が転出人口を上回る、転入超過となっています。この傾向は、富山県では富山市だけの現象であり、他の全ての県内の市町村は転出超過となっています。
今後も富山市は、人口や日常生活に必要な施設を集積した地域生活拠点と、複合的な都市機能を集積した中心市街地、それらを結ぶ公共交通を活性化することで、公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりの実現を目指しています。